

日本社会分析学会ニューズレター

2019年4号[2019年11月14日発行]

発行：日本社会分析学会事務局

〒753-8511 山口市吉田1677-1

山口大学人文学部 桑畑研究室内

編集責任者：桑畑 洋一郎(事務局長)

Tel:083-933-5242(直通)

E-mail: sasa@jsasa.org

ホームページ: <http://jsasa.org/>

郵便振替口座:01740-0-49579

(名義)日本社会分析学会

※第138回例会プログラムをお届けします。

※例会2日目終了後、臨時理事会を予定しております。

●第138回研究例会のご案内

歓迎の言葉

倉重加代(鹿児島女子短期大学)

このたび日本社会分析学会第138回例会を鹿児島女子短期大学で開催させていただくことになりました。鹿児島での開催は平成17年12月、冬の例会(第110回例会)が鹿児島大学で開催されて以来、本学では初めての開催となります。

鹿児島女子短期大学は昭和35年、幼稚園教諭養成所を前身とし、40年に短期大学として開学しました。3学科(児童教育学科、生活科学科、教養学科)、2専攻科(児童教育専攻、食物栄養専攻)で構成されています。建学の精神「時代に即応した堅実にして有意な人間の育成」のもと、社会の充実発展に寄与する人材の育成に努めています。

社会学の専任教員は開学の翌年からほぼ継続して、これまで千石好郎先生、円山重成先生、松浦勲先生、佐々木武夫先生、辻正二先生、吉良伸一先生、坂口桂子先生が教鞭を執ってこられました。私自身は現在、教養学科に所属しております。平成7年4月に着任した際は児童教育学科に配属され、11年度には生活科学科生活科学専攻に、さらに本年度4月、教養学科に異動しました。社会学を専門に学ぶ学生はいませんが、わずか2年の学生生活後に社会に出て行く逞しい学生たちに何を伝えられるのか、試行錯誤の日々が続いています。

本学のキャンパスは、当初、鹿児島市紫原という高台にありましたが、平成21年4月に同市高麗町に移転しました。JR鹿児島中央駅桜島口(東口)からナポリ通りを直進、徒歩10分あまりという便利な場所です。設置母体である学校法人志學館学園は、明治40年、創設者満田ユイが鹿児島女子手芸伝習所を開設したのが始まりです。伝習所は後に高等学校となり、その高等学校が平成18年に廃止され、本学はその跡地に建っています。紫原キャンパス跡地には、同じ学園の志學館大学が平成23年に霧島市隼人町から移転しました。

ただ、街中にキャンパスがあるため、車でお越しの方にはご不便をおかけいたします。もともと来客用駐車場数が少ない上に、例会開催日に学内で他にもイベントが予定されているため学園駐車場の利用が困難です。近辺の有料駐車場をご利用ください。

さて、鹿児島中央駅から本学に向かってナポリ通り左側をしばらく歩くと観光交流センターがあり、センター横、甲突川にかかる南洲橋からは、晴天時には桜島を見ることができます。橋を渡ったところが西郷隆盛はじ

め、多くの偉人を輩出した加治屋町で、甲突川沿いは維新ふるさと館や歴史ロードが整備され散策しやすくなっています。鹿児島中央駅に隣接するアミュプラザ鹿児島屋上の観覧車からの眺めもなかなかです。例会へのご参加を機に鹿児島のさまざまな場所を訪ねていただけたらとは思いますが、タイトなスケジュールでご参加の場合でも近いところで鹿児島を感じていただければ幸いです。

本学会の会員は、学内では私のみですが、学会員の先生方や学内の教員から多くの協力の申し出をいただいております。有り難い限りです。精一杯準備をして皆様をお迎えしたいと思います。年末の多忙な時期ではありますが、多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

★ 第 138 回 日本社会分析学会例会プログラム ★

日程：2019 年 12 月 14 日（土）～15 日（日）

会場：鹿児島女子短期大学（〒890-8565 鹿児島市高麗町 6-9）

（報告会場:本館 4 階 405 室、控室:本館 4 階 403 室）

※持ち時間は **30 分**（報告 20 分：質疑 10 分）が標準です。レジュメや資料は 40 部程度ご準備ください。

報告にてプロジェクター、PC が使えます。

12 月 14 日(土)

開 会 13:00

自由報告部会I (13:00～14:30)

1.「地域社会における国際交流活動の現状と課題

——福岡市 T 校区『日本語教室』の潜在機能の分析から」(s) 喜多 秀一郎(九州大学大学院)

2.「都市近郊地域における『サードプレイス』としてのスーパー銭湯に集う人々

——糸島市の事例から」(s) 武 雯涵(九州大学大学院)

3.「まちづくり活動の今日的展開に関する考察——福岡市東区箱崎地域の事例から」(s)

高寄 浩平(九州大学大学院)

シンポジウム「若者の移行過程——沖縄から、公営団地から」 (14:40～17:10)

報告者

1.「沖縄で教員になる——非正規教員への聞き取り調査から」 上原 健太郎(大阪国際大学)

2.「地元から建設現場へ——沖縄のヤンキーの若者の移行過程」

打越 正行(特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所)

3.「ヤンチャな若者の移行過程と地域社会——公営住宅集積地における生活史・誌調査から」

西田 芳正(大阪府立大学)

司会・コメンテーター

谷 富夫(甲南大学)

【シンポジウムの趣旨】

谷 富夫(甲南大学)

ここで「移行過程」とは教育社会学の専門用語で、子供が大人になる過程のことをいう。このシンポジウムでは、学校から社会へスムーズに移行できない(しない)若者たちの現実を考察する。

上原健太郎会員は沖縄をフィールドとして、教職になかなか就けない教員志望大卒者の移行過程を研究した博士論文『『間断のある移行』に関する教育社会学的研究』で昨年9月、学位を取得した。

打越正行さん(非会員)は、沖縄の建設業などで働く若者たちの生活世界を描いた『ヤンキーと地元——解

体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』(筑摩書房)を本年3月、上梓した。

そして、西田芳正さん(非会員)は、大阪の公営住宅に住む「ヤンチャ」な子供たちの移行過程を地域社会との関連で分析した「公営住宅集積地の地域形成・生活展開と移行過程」で本年9月、博士の学位を取得した。

3人の研究には地域的個性が濃厚である。上原さんと打越さんのフィールドは「沖縄」であり、西田さんのフィールドは「公営団地」である。このシンポジウムは、それぞれの地域的個性を深く掘り下げることによって、移行過程論の普遍的な鉱脈に到達できるかどうかのひとつの実験である。

懇親会 18:00~20:00(会費:有職者 6,000 円、有職者以外 4,000 円)

(会場:ジェイドガーデンパレス、鹿児島市上荒田町 19 番 1 号、Tel:099-257-1211)

※鹿児島女子短期大学より 17 時半発懇親会会場行のバスが出ます。また、懇親会会場より 20 時発鹿児島中央駅前・天文館行のバスが出ます。

12月15日(日)

自由報告部会II (10:00~11:00)

1.「“地域課題”の発生過程に関する一考察」(s)

桑畑 洋一郎(山口大学)

2.「在日韓国仏教とシャーマニズム」(s)

吉田 全宏(大阪市立大学)

閉会 11:00

※12月15日の報告終了後、臨時の理事会を開催いたします。会場は例会会場(本館4階405教室)をそのまま使用します。

シンポジウム「若者の移行過程——沖縄から、公営団地から」報告の要旨

[第1報告] 沖縄で教員になる——非正規教員への聞き取り調査から

上原 健太郎(大阪国際大学)

本報告では、沖縄で教員を目指すことについて考える。具体的には、「学校から職業へ」の移行過程の観点から、正規教員を目指す沖縄の非正規教員に焦点を当てる。

教員の専門性や学校現場の内実には議論を集中させてきた従来の教員研究は、正規教員を主な対象とし、非正規教員の存在を看過してきた。しかし実際は、正規教員になることは決して容易なことではない。正規教員を目指しつつ、非正規として学校現場で働く若者は多数存在する。正規職に就けずに、年齢を重ねていく者もいる。就職氷河期に労働市場に投げ出されたロスジェネレーションと同様、非正規教員として年齢を重ねていく者には、それ固有の経験や問題がある。非正規教員はどのような状況に置かれているのか。非正規教員が制度的・財政的に生み出されたとする指摘はあるが、非正規教員が置かれた状況に踏み込んだ研究はない。

本報告では、ケーススタディとして、沖縄の非正規教員の語りに焦点を当てる。沖縄は、47都道府県のなかで非正規教員の割合が突出して高く、多くの示唆が得られると思われる。

沖縄の非正規教員の語りから浮かびあがってきたことは、流動性、非対称性、多忙化である。いくつかの学校現場を転々とし、正規教員との「立場性の違い」を突きつけられ、採用試験の勉強時間を確保するのに四苦八苦する。ただしこうした過酷な状況は、やりがい・高給・浪人ネットワークの存在によって緩和される。教えることには喜びがあり、県内の民間企業では得られない額の給料は大きな魅力となる。同じ境遇に置かれた仲間存在に勇気づけられることもある。こうしてなんとか非正規教員として働き続けることができているのである。ただ

し年齢を重ねていくうちに、少しずつ、「正規教員を目指す」というアスピレーションが冷却され、精神的消耗を帰結するケースもある。ここに、教員世界に若者をつなぎとめているやりがい・高給・浪人ネットワークの逆機能が確認できる。

こうした特徴について、地域的な文脈から考察を進めるとどうなるか。しばしば沖縄の若者は地元志向が強いといわれる。今回の調査対象者の非正規教員の多くも、沖縄という地域で教員になることに強いこだわりをみせていた。沖縄という「地域」と、教員という「職業」の両方にこだわり、狭隘な大卒労働市場に参入していく。言い換えると、沖縄にとどまり/Uターンし、非正規教員として働きながら、正規職獲得のための競争に身を投じていくのである。那覇都市圏への人口集中という沖縄社会の特徴もまた、その競争を激化させる一因だろう。また先述したように、非正規教員が置かれた状況は過酷である。と同時に、容易には抜け出せないほどの魅力がその世界にはある。高給という条件は、零細サービス業中心の脆弱な沖縄経済において「特別な意味」を持つ。仲間の存在もまた、全国でもっとも非正規教員の割合が高い地域ゆえの条件だろう。さらに付け加えると、物心両面における家族・親族の支えも無視できない。

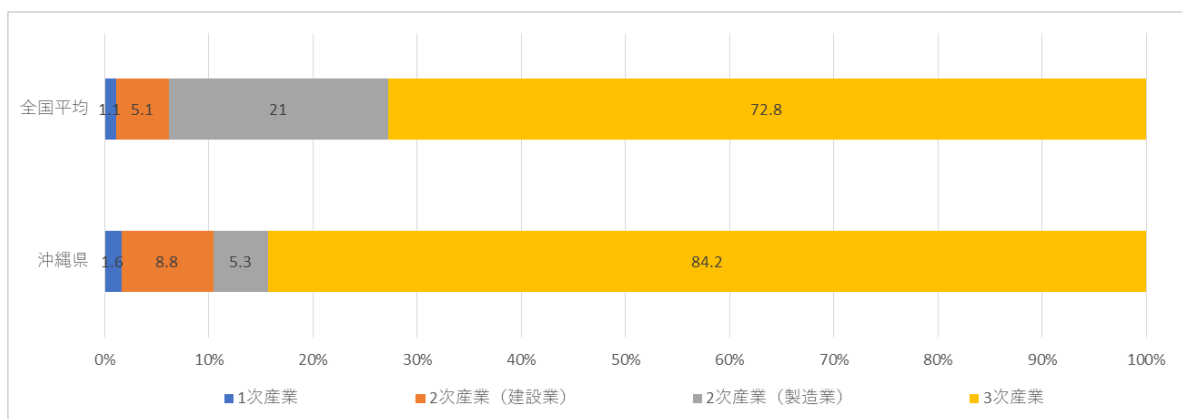
先行研究が指摘するように、非正規教員は制度的・財政的に生み出された存在だ。沖縄も例外ではない。しかし本報告が示唆するのは、非正規教員の社会的現実を制度的・財政的側面に還元することはできない、ということだ。上述の通り、正規教員を目指すという職業選択の背景には、沖縄社会の社会・経済的要因が幾重にも絡まりあっている。

教員に関するこれまでの研究は、教員の専門性や学校現場の話に議論を集中させてきた。それに対し本報告は、教員志望者の「学校から職業へ」の移行過程を考える際に、地域的な文脈がいかに無視できないかを主張する。

[第2報告] 地元から建設現場へ——沖縄のヤンキーの若者の移行過程

打越 正行(特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所)

図：沖縄県と全国の総生産の産業別割合



(注) 沖縄県、全国ともに 2013 年度 (資料) 内閣府「県民経済計算」より

本報告は、上のグラフをもとに「統計的事実の実存的意味」について考察することを目的とする。結論を先取りすると、沖縄の周辺層であるヤンキーの若者たちは、本土とは異なる移行過程を経験していることについて述べる。

本土も沖縄もヤンキーの若者たちが就く職業は 2 次産業が中心である。そうみれば、沖縄のヤンキーの若者たちの職業は全国平均の約半分しかないことがわかる。数値が半分となるのは、本土にはある製造業が沖縄

にはすっぽりと抜け落ちているためだ。その結果、沖縄の彼らは、学校を早々に見切り、地元の先輩たちと関係性を築くことで建設現場への移行を遂げようとする。このように学校から自ら離れていく様子は、現在だけでなく「復帰」以降から現在までの長い期間にわたり生じてきたことだ。

これは学校から工場への移行過程を描いた『ハマータウンの野郎ども』(Willis, 1977=1996)における「野郎ども」とは対照的である。野郎どもは学校に対抗し鋭い洞察を展開するが、それはその後製造業の工場で働く見込みがあるから可能なことである。他方で沖縄のヤンキーの若者が学校から自ら去っていくのは、学校卒業後に工場労働者となる見込みがないためである。製造業を基礎とする本土のヤンキーの若者は、(反学校文化を含む)学校と連動して移行を遂げる。他方で建設業を基礎とする沖縄の彼らに、学校は役に立たない。そこで彼らが最後に頼るのが地元である。このようにヤンキーの若者の移行過程をみても、沖縄は本土とは異なる経験を蓄積してきたのである。

文 献

Willis, Paul, 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Ashgate Publishing Limited (=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗, 労働への順応』筑摩書房).

[第3報告] ヤンチャな若者の移行過程と地域社会——公営住宅集積地における生活史・誌調査から

西田 芳正(大阪府立大学)

1. 「移行」と「地元」(地域社会)への着目

若者を対象とする研究における近年の傾向として、「大人への移行」をテーマとする調査研究が活発に展開されている。その背景として、雇用の不安定化、非正規雇用の拡大により生じた「フリーター」問題など、学校を離れた後に安定した仕事、大人の生活を実現できない若者が増加している事態がある。また、従来の若者を捉える視点には世代として一括りにする傾向が見られたのに対して、出身階層が低い、生活に困難な条件を抱えた若者の経験を明らかにする研究も意識的に進められている。

こうした調査研究が明らかにした重要な知見として、困難な状況にある若者の生活を支える「地元」の存在をあげることができる。東京下町地域で高卒後の若者を丹念に追いかけた乾らのグループによるインタビュー調査では、若者たち自身の「地元つながり」だけでなく親や地域住民が苦境を生き延びるうえで大きな支えとなっていることが報告され(乾編 2013)、「非サラリーマン」の親をもつ若者の下位文化を地元の世界に見出した研究(新谷 2002)もある。

発表者は20年前に「学歴獲得競争」に巻き込まれていない若者の姿を地方の低階層出身者が形成した「文化住宅街」のなかで描いた(谷編 1996)。今回は公営住宅集積地調査で得られた知見を報告する。

2. 公営住宅集積地調査の経緯

今日の公営住宅は、「福祉住宅政策」が進められるなかさまざまな形で困難な条件に置かれた住民の比率が増加しており、それは我々が行った国勢調査データ分析でも確認された。「社会的排除が地域的に顕在化した姿」を捉える目的で大阪府内3箇所での調査に着手したが、そこでは住民組織による活発な活動が展開されており、「地域社会の形成と持続」および「若者の移行過程」をテーマとした調査として、住民への生活史インタビューと行事等への参加を2015年から現在まで継続している。

3. ヤンチャな若者の移行過程と地域社会

調査で得られた知見については報告時に詳しく提示する。概略は以下の通り。「ヤンチャ」と呼ばれる若者たちは、特に中学在学中に学校内外で教師が求めるルールを無視するふるまいを続けるが、一部の教師との間に形成される信頼関係も重視されており、アンビヴァレントな関係が特徴である。また、当初は同じ学校・学

年の「ツレ」とのつながりだったものが上の学年や他の学校にまで関係がひろがり、特に年長者の姿が学校を通したキャリアを相対化する、「働いてお金を儲ける」という志向を強固なものとするモデルとして重要な働きをしている。中卒や高校中退後に就く仕事は先輩からだけでなく親や近所の大人たちからの紹介というケースも少なくない。社会的な上昇や他地域への転居など移動することを志向せず周囲の人々とのつながりに重きを置く文化が地域住民に分け持たれていることが、地域への定着・還流の傾向や愛着意識、子どもへの教育期待に現れているが、こうした文化を土台としてヤンチャな子たちのふるまいと大人への移行過程を解釈することができる。

4. 検討を要するポイント

これらの知見をもとに検討すべきポイントとして以下の諸点があげられる。まず、他所者からは否定的な評価を受けるヤンチャな子の移行過程は、当事者にとっては大人に向けての「自然な移り行き」として解釈できるのではないか。また、当該地域で上記した文化が形成されたその条件。さらに、こうしたケースは他では見られない「レアな飛び地」なのかどうか。関連する点としては、地域(中学校区)によりヤンチャな子のふるまいに違いが見られるという指摘があり、そこに地域の文化が関与している可能性について。マクロレベルのテーマとしては、不平等の再生産と「自然な移り行き」の関係をどう考えるべきか。さらにそうした検討を踏まえて、こうした地域における学校教育のあり方、「子どもの貧困」対策や若者支援のあり方を再検討し有意義なものとする手が見出すことである。

文 献

新谷周平 2002「ストリートダンサーからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響」『教育社会学研究』第7号.

乾 彰夫編 2013『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか——若者たちが今(大人になる)とは』大月書店.

谷 富夫編 1996『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.

西田芳正 2012『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会.

●会場までの交通案内

* 鹿児島中央駅より

① 徒歩

「ナポリ通り」直進 10 分程度。

② バス(鹿児島市営バス)

16 番線(鴨池港・文化ホール線、鴨池港行き、中央駅バス停「東 15」)

13 番線(天保山線、市役所前行き、中央駅バス停「東 14」)

いずれも高麗橋で下車。下車後鹿児島女子短期大学まで徒歩 3 分程度。

③ 市電

「鹿児島中央駅前」から市電 2 系統、「鹿児島駅」行きに乗車、「高見馬場」下車。市電 1 系統「谷山」行きに乗り換えて「新屋敷」下車。下車後新屋敷電停より徒歩 5 分程度。

※電車の乗り換えがあるのでやや回り道になります。

* 空港より

・鹿児島空港バス停 2 番のりば(鹿児島市内行き)

①「鹿児島中央駅前」下車 徒歩 10 分※バス乗車は 40 分程度

②「天文館」下車※バス乗車は 50 分程度→電停「天文館」より市電 1 系統「谷山」行きで「新屋敷」下車、徒歩

5分程度。

●アクセスマップ(鹿児島女子短期大学 HP より転載)



●キャンパスマップ(鹿児島女子短期大学 HP より転載)



●宿泊

鹿児島中央駅周辺や天文館エリアにホテルが多数ございます。

※事務局からのお願い

ニュースレターをメール配信する形へ順次移行しようと考えております。つきましては、「紙は不要でメール配信のみで良い」という方は、お手数ですがその旨事務局 sasa@jsasa.org までご連絡ください。なお、これまでに「メール配信のみで良い」とご連絡をいただいた方につきましては順次メールのみでのニュースレター配信へと移行していております。